

花とまがびと

朔月京物の怪語り

沙藤 堇

Sumire Sato

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

序章

7

花の章

桃花のはなし 一

17

一 上巳の節句

24

桃花のはなし 二

58

二 逃走

72

桃花のはなし 三

93

三 主の名

106

桃花のはなし 四

124



鬼の章

青葉のはなし 一

133

一 白蓮京

140

青葉のはなし 二

162

二 百鬼夜行

171

青葉のはなし 三

203

三 再会

222

終章

234

あとがき

248



登場人物紹介

〈登花楼の住人〉

伊織……主人公。雑色募集に働くことになった

桃花……登花楼の主。物の怪の友達が多い

菖蒲……桃花を主と大切にする実質的経営者

青葉……力自慢で雑駁な性格の荒事担当

白菊……性別不詳の美貌を誇る呪術担当

月白……夜の神、月黄泉の仮の姿。使用人

清河院……白蓮京最高権力者

滝矢浄盛……清河院の戦友であり盟友

春時雨……蓮台ヶ原に住む妖狐

胡蝶丸……物の怪の祭りの夜、桃花と出会う少年

篠……青葉の昔の盗賊仲間

結……伊織の姉

挿画 旭炬



花とまがびと

朔月京物の怪語り

序章



鳥が鳴いている。とびきり美しく鳴いている。

山間に響き渡る声の主は鶯。「春告鳥」や「花見鳥」など、幾多の名前を持つ小鳥が、咲いたばかりの桃の枝にとまって春を謳歌している。

囀ったり、ほころんだ桃の枝で跳ねたりしていた小鳥は、人間の足音に驚いて羽ばたいた。

「おじさん、僕もう歩けないよお……」

「おお、そらあ、悪かったなあ」

少年と、壮年の男の二人連れた。もう無理だと涙目になる少年に男が頷き、桃の木の根元に座らせた。春の気配は濃くなりつつあるが、まだ山道には雪が残り、少年の奴袴は泥と雪で斑に色を変えていた。

「お水飲みたいよお」

山に似合わぬ鮮やかな蘇芳色の掛水干を着た少年は、華奢な手で首筋に風を送り、甘えた声を出した。大きな瞳の、中々整った顔立ちをした少年だ。耳の少し下で真っ直ぐに切り揃えた髪と、紅をさした唇。おしろいをはたいた頬が可愛らしい。

「そうかあ、そうかあ、いっぺえ歩いたもんなあ」

揮の上から帷子だけを引っかけた男は、頷いて少年の頭を撫でた。質素でありふれた装いに反して、男の髪と瞳は明るい茶色。皺の浮いた赤ら顔は彫りが深く、一目で異国の者と分かる顔立ちだった。

「ちいっと待ってろお。おっちゃん、あつちの沢で水汲んで来てやるべえな」

男は、顎の下に滲んだ汗を手の甲で拭って、新芽を纏った木々の向こうを指さした。僅かな水音が、近くに水のある事を伝えている。

「冷てえ水飲んだら、すうぐ元気になっからな」

この時期に川へと流れ込む雪解け水は桃花水と呼ばれ、冷たく澄んでいるのだ。

「うんっ。ありがとう、おじさん」

にこつと微笑む少年の頭をわっしわっしと撫でて、男は腰を叩きながら斜面を下つて行つた。

少し薄くなつた頭が左右に振れて遠くなるのを見送つた少年は、男の姿が消えたのを確かめると、ふいつと天を仰いだ。

雲がほんやりと広がり、空は淡く霞んでゐる。

「はあーあ。やれやれ」

あくびに近いため息をつき、彼は弓のようにしなつて伸びをした。座つたまま両足で空を蹴り、足の重みで軽やかに立ち上がる。

「順調、順調、さつすが俺」

にこつと鋭い犬歯を見せて笑い、おもむろに脇の筋を伸ばすと、肩を回したり、手首と足首を振つたりして身体の節々をほぐし出した。

それから、両手を上げるとしなやかに上半身を反らせて、そのまま地面に手をつく。

その時、野太い怒声が辺りに響きわたつた。鶯が

鳴き止み、沢のせせらぎが掻き消される。

「おーつと、いらつしやつたあ」

少年は反り返つたまま、面白そうに眉を上げた。ほつ、と小さなかけ声と共に地面から足を離し、逆立ちをしてから立ち上がる。

二股に裂けた栗の木が手近な所に生えているのを見付けると、弾んだ足取りで駆け寄つて、猿のように天辺まで登つてしまつた。

「見つえるっかなー」

鼻歌交じりに片手で枝にぶら下がり、身体が揺れないように足の裏を幹に付ける。

樹の上からは、なだらかに下つていく山肌が一望出来た。若緑色に色づく木々に、時折桃の花が交ざつて色を添えている。斜面を横切つて流れる沢が、随分先で瀉になつてるのが見えた。

眉の上に掌を当てて底を作り目を細めると、見覚えのある背中が、沢の縁で立ち尽くしている。

「あーらー」

男が竹筒を片手に見上げているのは、対岸の崖の上だった。三人の大柄な男が薙刀や革包の太刀を手にして立っている。先程からの怒声は、水を汲みに行った男に対するものだったのだ。

彼らは皆揃いの僧衣を纏い、白い袈裟で頭を覆っている為、人相は分からない。ただ、岩のような体軀から、よく鍛えられているという事が見て取れた。

男が怯えているのが背中からでも伝わる。

後退って逃げ出そうとしたが、ぬかるんだ泥にでも足を取られたのだろう、いくらも進まずに転んでしまい、頭から沢へと落ちていった。

「あーあー、やっちゃったー」

盛大に上がる水飛沫を眺めて、少年はやれやれと額を叩いた。同情の欠片を眼差しに浮かべつつも、助けに行く気配はまるでない。

沢の中でもがく男をしばらく眺めていたが、やがて屈強な男達が一斉に崖を下り始めたのを見て、両足を預けていた幹を蹴った。

枝を掴んだままぐるりと一回転して、ぶら下がっていた枝の上で逆立ちをすると、あっさり均衡を取って立ち上がった。

まだ葉の少ない季節だ。暗い夕陽のような蘇芳の衣は嫌でも目立つ。

「さつさと逃げちまうのが吉つしよー」

袖で唇を拭い、にっと鋭い犬歯を見せて笑った。

化粧をした愛らしい面差しが酷薄に歪む。

深緋色の紅が顎の上を横切つて、まるで口が裂けたようだ。

数段下の枝へ降り、隣の木に飛び移ろうとしたが、「おっと」と呟いて止まる。

「こーれーは、持ってちゃ駄目だろー、っと」

懐から薄い金属の冠を取り出した時、男の悲鳴が聞こえてきた。

少年は沢の方へ顔を向けると、冠を指先でつまんで、腕を真横に伸ばした。

「さよなら、おじさん」

無造作に手放された冠は、陽光を弾きながら一直線に落ちていった。冠の行方も確かめず、少年は思い切り枝をしならせ、隣の木に飛び移る。

「さーでさーでっ。どこに行こうかなーっ、と。まあどこにでも行けるんだけどー。行きたい場所なんか、そんなすぐ思い付かないしー」

気楽な風情でほやき、少年は素晴らしい身のこなしで木々を渡って行った。手に入れた自由を満喫するようにくすくす笑い、枝と枝の間を抜けて行く。

「およ？」

近くに枝がない事に気付いた少年は、枝を掴んでいた両手を離し、ほとんど木の天辺から飛び降りた。受け身を取って地面で何度か転がってから、その勢いを使ってぽんと跳ねて立ち上がる。

そこは、広場のようなひらけた場所だった。

春の呼び声を聞く季節だと言うのに草木の一本も生えず、剥き出しの地面が広がっている。

「まあ、春だし。しばらくは山で食ってけるけど、

やっぱりさっさと稼がないとその内死ぬなー」

確信を持って頷きつつ、肩に付いた泥を払っていた少年は、ふと指と指を擦り合わせて、衣に付いていた土塊を押し潰した。

脆く崩れ去る土は、消し炭のように黒い。

汚れた糸鞋の爪先で足下を掘ると、同じような塊がぼろぼろ出てくる。

少年はふつと指先を吹いて土を飛ばした。

見回せば、山肌を均して平らにした地面に、黒ずんだ石がいくつも規則正しく並べられている。

顔の前で指を動かす模様がなぞった少年は、頭の中で線を繋いで、首を傾げた。

「火事かねえ？」

並んだ石を繋げれば、家の土台が見えてくる。この場所には、昔きつと家が建っていたのだ。

それが燃え落ちて、跡形もなくなつて、ただ土台の石と、炭だけを残しているのだろう。

じゃりつと音を立てて、足下で炭の粉が砕けた。

「結構でかいし、貴族の坊ちゃんが側室でも住ませてたかー、表に出せない子供を育てたかー」
失われた家の中を散策するように、少年はうろろろと石と石の間を辿って指をさす。

「多分この辺が正殿でー、あれが北対屋でー、あつちが厨と倉でー。あつ、これ池の跡じゃね？ かつそ、いい暮らししやがつて！」

返事をするように鶯が鳴いた。

顔を上げると、丁度北対屋が在ったであろう場所の正面に、桜の大樹が生えているのだった。

ひらけた場所の、森との境界に近い場所だったのだ、他の木々に紛れて気付かなかつたのだが、一度目に留まればもう気にせずにはいられない。

不格好な桜だ。

幹は太く立派だが、燃え落ちて半分しか枝が広がっていない。それでもまだ樹自体は生きているように、咲くのを待つ僅かな花芽を求めて、枝の上で小鳥が跳ねている。

少年は吸い寄せられるように桜の大樹へと近付き、静かに濃墨色の幹を撫でた。ざらりと乾いた感触が手に伝わる。

屋敷が燃え落ちる前は、この立派な桜でさぞ素晴らしい花見が出来た事だろう。

「……まあ、焼けちゃえば何も残らないけど。諸行無常つてやつだよね」

幹から手を離れた少年は、踵を返して頭の後ろで手を組んだ。下がった気分を持ち上げるように、わざと大きな声を出して空を見上げる。

「あーあ、どっかにいい金づる落ちてないかなー」

「なら、良い仕事を知っているよ」

「つうえ!!」

まさか返事があるとは思わず、少年はひっくり返つた声を上げて飛び退いた。

黒焦げになった桜の大樹の上に、青年が一人。実に自然に足を組み、微笑んでいた。

「あんた……何？」

少年は目を細め、注意深く青年を観察した。

やや垂れた目が柔和な印象を与える、二十歳を少し過ぎた程度の男だ。小綺麗な直垂を纏ってはいるが、籠手や臍当て、右腰に脇楯を着けているところを見ると、どこぞの武士らしい。

「困っているみたいだから、助けてあげたくて。ねえ、君にひとつ頼みたい事があるんだけど、協力をしてくれないかな？」

青年の帯に小さな腰刀が挿されているのを認めて、少年は唇を舐めた。それからふいになっこり笑うと、可愛こぶって自分を抱き締め、肩をすくめる。

「残念ですけど遠慮しまあーす。知らない人に付いて行ったら、怖いおじさんに売られちゃうよーってお母さんが言っていましたんでー」

少年のおどけた様子にくすっと笑い、青年は組んだ足の上に肘を乗せ、頬杖をついた。

でもねえ、と間延びした口調で、おっとり囁く。「知らない人に付いて行かなくなつて、売られちゃ

う時は売られちゃうものだよ」

「ま、そうっすけどー。なるべくそういう事態は御遠慮したいって思うもんでしょ、普通」

「別に、君を売ろうと思っている訳じゃないんだけどなあ。怪しい者じゃないんだよ……って言っても、信じてもらえないかな？」

「そりゃーまー、今のお兄さんの怪しさは、留まるところを知らないっすから。いいこは付いて行っちゃいけないって俺の本能が囁きまくりなんっすよ」

「あはは。君、面白い人だねえ」

「おやおや光栄っすー。んでもまあ、俺もそこそこ忙しいんで、これにて失礼しまーす。さよならー」

少年はにやつと笑うと、頭の横まで右手を挙げて踵を返した。

「お祭りがあるんだ」

薄い背中に、何気無い声が投げられる。ぴたりと足を止めた少年に、青年は穏やかな口調で続けた。

「朽ちた都で、お祭りがある。君にとっては稼ぎ時

なんじゃないかな？」

ほんの僅かに迷った気配を見せた少年は、首を後ろに反らすと、ぐにやりと背中を弓なりにして、青年と青空を見やった。逆さまのまま顔を歪めて、おちよくるように訊ねる。

「取引つすかあ？ 俺は安くないつすよ？」

大袈裟なものじゃないよ、と青年は首を横に振る。「とある可愛い女の子を、助けてあげたいだけ」

その時、離れた場所に生えていた桃の木で、甲高く小鳥が鳴いた。

ほころびかけた花の陰で、ぱつと小さな羽が舞う。揺れた枝の上に、大きな鳥が舞い降りた。鷹だ。

小鳥が一斉に羽ばたき、群れを成して逃げて行く。鷹の爪には、逃げ損ねた一羽が捕らえられていた。鷹が座撃する小さな身体には鋭い爪が食い込み、どう足掻いても、逃げる事は叶わない。

「……ふうん？」

ちらりと桃の枝に止まる鷹に目をやったが、すぐ

に少年は興味をなくして、反らしていた身体を元に戻した。軽やかな動きで再び桜の大樹へと向き直つて、にんまりと満面の笑みを貼り付ける。

その目に浮かんでいるのは、面白がるような光だ。「その話、詳しく教えてくれますか、お兄さん？」

ふわつと、青年の笑みが深まった。

重さを感じさせない動きで桜の枝から飛び降りると、少年の真正面で音もなく着地する。

「そうだなあ、どこから話そうかな」

烏帽子から微かに零れ落ちた前髪が、ほのかな色気を漂わせた。

「あのね……」

ぶちつ、ぶちつ。

桃の枝で、小鳥が食い千切られる音が響いていた。

花
の
章



桃花のはなし 一

青い桜の夢を見た。

*

冷たい色をした月の光に照らされて、雨みたいに散っていく、青白い桜。

風はない。庭の草木はちつとも動かない。

なのに、満開の桜の花びらは、くるくる回りながら、次から次へと落ちていく。

青い桜に呼ばれているような気がして、桃花は両手を伸ばしていた。

思う通りに動けない。誰かに抱き上げられているのか、うんと地面が遠い。

ねえ、私、あそこに行きたいの。
喋れなかったから、その人の柔らかい頬を叩いた。

伝わらなくて、髪も引つ張った。いい匂いのする薄紫の衣に嚙り付いて、よだれでべとべとにした。袖から出した単衣で口を強く拭かれて、少し痛かった。「御覧になれますか、姫宮？」

優しい声がそう言った。桃花は一生懸命、桜に手を伸ばしながら、甲高い声を上げた。

桃花の言葉が分かった訳でもないだろうけれど、その人はゆっくり歩き、階を降りて行った。

地面が少し近づくなり、小さな黄色い花が芽吹いているのが見えた。

私達は庭を横切って、青い桜に近付いて行く。真下で見ても、やっぱり桜は青かった。

古くて大きな桜。枝に女の人が座って、手招きをしていた。長い薄絹を肩にかけて、不思議な形に髪を結っている、綺麗な女の人。

あの人が呼んだのだと、桃花には分かった。風もないのに花が散るのは、彼女の仕業だ。とても綺麗だから、見せてくれているのだ。

半分透^すけたその人が、桃花に向かつて手を振つてくれた。嬉^{うれ}しくなつて、声を上げて笑つた。

両手を叩いて喜んでいると、樹の上の女の人はにっこり笑つて、青い桜の枝を揺らしてくれた。

はらはら散つた花びらが、右に左に揺れてから、指に貼り付いた。

「姫宮が笑うと、桜が散る……?」

桃花を抱いた誰かが、不思議そうに呟いている。

私が笑つたからじゃなくて、桜の上に居るあの人が花びらを散らしているからなのだと思つたか、けど、上手に伝える方法が分からなかつた。

部屋の隅^{すみ}の暗い所や、天井^{てんじやう}の模様^{すさま}の間から現れる友達には簡単に気持ち^{こころ}を伝えられるのに、桃花を抱き締めてくれるこの優しい人には、いつも分かつてもらえない。

言葉は沢山知^しっているのに。あなたの言っている事を、ちゃんと分かっているのに。

腹^{はら}が立つてもどかしくて、両手を振り回した。

けれど彼女は泣きそうになつて、桃花に慌てもしないで、ゆっくり身体を揺すつてくれる。

辺りの景色が縦に揺れるし、お腹の底が引つ張られて、何だか面白い。

すぐに機嫌を直して笑う桃花に、桜がちらちら降つてくる。

「咲け、咲け、桜花^{さくらばな}……。花が咲いたら迎えに来ると、おつとう、おかあが言つていた……」

優しく身体を揺らし、誰かは静かに歌つていた。低くて、小さな、うとうとと眠くなる声だつた。

「散れ、散れ、桜花……。はあやく散らんと枝折るぞ、鐘^{かね}を鳴らして寝かせぬぞ……」

背中を温かな手で撫でられて、瞼^{まぶた}がだんだん重たくなつてきた。歌を聞いているだけで安心して、怖い物なんか、ここには絶対に近寄れないんだと心から思った。青い桜と、白い月の光と、いい香りと、優しい歌が身体の中にゆっくり満ちていく。爪先が温かくて、頭^{かぶ}がぼんやりして、目を擦つた。

「眠たいのですね、姫宮。ここは寒うございます。

お部屋に戻りましょうか」

それを聞いた途端に、桜の枝に座っていた女の人が、怖い顔をした。

目を見開いて、大きく口を開けて、首を横に振る。

まだ花を沢山付けた枝が、いくつも降ってきた。

風が吹き付けて、二人を押し留めようとする。

「風が出て来ましたわね……」

桃花を抱いた誰かが呟く。

桜の枝に座った女の人がうんと怖い顔をしているのに、全然気にしていないみたいだ。

行っちゃいけないって。ねえ。

教えてあげようと思って、桃花は大きな声を上げて、両手で叩いて、蹴つ飛ばした。

「姫宮、下に降りられたいのですか？」

勘違いした彼女は、桃花を抱いたまま桂つげを一枚脱ぐと、迷わず地面に敷いてくれる。

色鮮やかな桂の上に、桃花をそっと座らせると、

もう一枚脱いで、寒くないように肩にかけてくれた。

それだけで、桃花はまた、すぐに機嫌を直してしまうのだった。抱き上げてくれていた人が目の前で膝ひざをついたから、微笑んだ顔がはつきりと見える。

綺麗な人だ。月明かりにほんのりと照らされた顔は整っていて、とても優しい目をしている。愛していると、何も言わないのに伝わってくる。

前髪に付いた花びらをそっと取ってくれたのが嬉しくて、桃花は笑いながら手を伸ばした。

その時、いきなり大きな音がした。

物を叩いた時の音。何かが倒れて、壊れる音。男の人の、太い怒鳴り声。いくつもの足音。

驚いて、怖くなって、桃花は大声で泣き出した。息を吸ったら、焦げ臭かった。苦い味に舌がびり

びりして、ますます怖くなった。

固い物がぶつかる音がした。男の人の笑い声がいくつもして、黒い煙が上っていく。御簾みすの向こうが、ぱっと明るくなった。

桃花の前で膝をついていた人が、物凄^{ものすけ}い悲鳴を上
げた。両手で桃花を抱え上げると、走り出して、す
ぐそばの、緑の葉が茂^{しげ}る椿の根元に座らせる。

泣き喚^{なみ}く桃花の前で、桂をみんな脱いでしまうと、
頭に被^{かぶ}せてきた。

布に遮^{さえぎ}られる直前に見た、無理をして作った彼女
の泣き笑いが、ぎゅつと胸を苦しくさせた。

目の前が真つ暗になって、自分の泣き喚く声が大
きくなる。あの人が行ってしまったと分かったのに、
布が重くて立ち上がれない。どうしてこんな事にな
っているのか分からない。

ただ、かけてもらった桂の残り香が、煙の臭いに
掻き消されていくのがとても怖かった。

出して、出して。

両手を大きく振り回して、泣き喚いた。

その、言葉にもなっていない声を聞いて、友達か
あちこちから集まって来る。桃花の願いを聞いて、
桂を持ち上げてくれる。

涙で濡^ぬれた頬が冷たくなった。煙の臭いが強かつ
た。庭はとても明るくて、さっきまであんなに青か
った桜の花びらが、真つ赤に見えた。

ごんごん煙を上げて、屋敷が燃えていた。

泣き喚く桃花の声を聞き付けて、誰かの足音が近
付いて来る。知らない足音が、いくつもいくつも。

桃花は泣きながら、生まれて初めて、人の言葉を、
「おかーあ……さあ……っ！」

——叫んだところで、目が覚めた。

ぱちぱちとまばたきをすると、目のほじっこから
冷たい涙が流れた。

胸がどきどきしている。とても怖い夢を見た。

夢でよかった。まだ手が震えている。

足下に生ぬるい何かが当たったので、寝転がった
まま手を伸ばすと、一番仲良しの子鬼だった。

鞠^{まり}みたい丸くって、小さな角と手足が付いてい

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。